

## サッカー・サポーターに関する研究：韓国の「レッドデビルス」現象を中心に

呉, 炫錫  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494567>

---

出版情報：比較社会文化研究. 14, pp. 53-61, 2003-10-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：



# サッカー・サポーターに関する研究

—韓国「レッドデビルス」現象を中心に—

オ 呉      ヒョン ソク  
                 炫 錫

## はじめに

本稿は、2002年日韓共催ワールドカップ時の韓国で、「レッドデビルス」というサッカー・サポーター集団が行った街頭応援について議論するものである。レッドデビルスについては、これまでも、さまざまな視点からさまざまな事柄が論じられてきた。そうしたなかで、本稿が扱うのは、「レッドデビルス」と韓国のナショナリズムがどのように結びついていたのか、また結びつこうとしているのかという問題である。最初に、レッドデビルス成立の起源とその呼び名で呼ばれる人々が誰たちなのかを明らかにし、次に、韓国社会のなかでサッカーというスポーツがもつ意味について論じてみたい。そして、そのうえで、「レッドデビルス」とナショナリズムとの結びつきを検討するにあたって重要ないくつかの議論を整理しながら、そこでの自らの見解を示そうと思う。

## 1. 「レッドデビルス」とは誰か

「レッドデビルス」という言葉が最初に用いられたのは、1983年メキシコ世界青少年サッカー大会においてである。そこで韓国の青少年チームが4強進出を決めた時、そのユニフォームの色が赤だという理由から、同チームに対して世界の報道機関が付けた名称が「レッドデビルス」であった<sup>(1)</sup>。この「レッドデビルス」がサポーター団体の名前として定着したのは次のような段階を経てであった。

まず、1995年6月、韓国サポーターの最初の応援団「ユゴン象プロサッカーチーム応援団」が誕生した。この応援団から、1995年、「Great Hankuk Supporters Club」が構成され、1997年8月には、パソコン通信を通して公式に「レッドデビルス」が発足した。つまり、この時点で「レッドデビルス」は、国家代表チームではなく、その試合を応援する団体を指すようになった。その後、1997年8月、レッドデビルスは、中国との試合において本格的な応援活動を始め、同年9月、東京での対日本戦(98年フランスワールドカップアジア最終予選3回戦)で最初の海外遠征応援を行なった<sup>(2)</sup>。レッドデビルスはそれから発展を続け、2002年の時点で報告された会員数は12万人であった。

「レッドデビルス」の存在は、韓国社会の観察者の間では早くから注目されてきた。チェ・ウォンキは、レッドデビルスには次の六つの文化的特徴が備わっていると述べた<sup>(3)</sup>。

第一に、「レッドデビルス」は、オンライン・オフラインを中心とするサイバー共同体である。レッドデビルスは、パソコン通信を通じて、数多くの同好会に出会いの場を提供しており、その出会いの場は現実空間における応援の場と直接につながっている。

第二に、これと同時に、「レッドデビルス」では、一つの応援集団としての高度な体系的組織化が行われている。レッドデビルスは、広大な全国的組織であるが、そこには応援の計画を立案・実行する中央運営集団が明確に存在する。つまり、この中央運営集団による工夫と働きによって、広大な組織内部の一体感が強められているのである。

第三に、その運営全般における民主的なスタイルも、レッドデビルスの特徴となっている。従来のパソコン通信から現在のインターネットまで、広範囲の仮想空間で行われる多様な意見収斂と運営陣の選出のスタイルは、民主的であると同時に、先進的だという印象をあたえる。

第四に、「レッドデビルス」は、非暴力的な応援文化を志向する。レッドデビルスは、自発的に倫理委員会を設置しており、暴力的応援文化を徹底的に排除するなど、サッカー応援文化の非暴力化を主張している。

第五に、財政の非従属性である。財政の基盤が構成員の自発的参与と自体的収益事業に基づいているため、財政の独立性が確保され、応援の閉鎖性を克服できる。

最後に、レッドデビルスは、応援の文化運動化を実践している。レッドデビルスが志向する究極的な目的は、サッカーに対する熱情といえる。レッドデビルスの応援文化は、韓国の社会変動の過程から産出された様々な問題点を克服するような社会的可能性としての文化運動の性格を志向しているといえる。

こうした特徴をあげながら、チェ・ウォンキは、「レッドデビルス」が韓国の社会で新しい文化運動の可能性を提示していると主張した。

しかしながら、ここで述べておかねばならないのは、2002年ワールドカップ時におけるレッドデビルスの街頭応援

(以下、街頭応援)を考察する場合、この「レッドデビルズ」という集団そのものに対して、上とは別の新たな定義や説明が必要になるということである。というのは、街頭応援はたしかに従来のレッドデビルズの率先によって行われ、参加した人々全体も「レッドデビルズ」という名で一括して呼ばれたが、実際にそこには、12万人という規模を超えて、もとはサッカー・ファンではなかった人たちも数多く含まれていたからである。その総数は、数百万人に達したともいわれている。つまり、この場合の「レッドデビルズ」は、サッカーへの情熱をもつ人々の集まりというよりは、むしろ祝祭の雰囲気を楽しもうとした人々の集まりである。そして、現在韓国で「レッドデビルズ」といえば、それはこうして街頭応援に参加した人々、より象徴的にいえば、そこに赤いTシャツを着て集った人々全体を広く指すようになっている。

以下より「レッドデビルズ」として指すのも、こうしたきわめて膨大な数の人々のことである。だとして、この「2002年型」レッドデビルズには、先述のチェ・ウォンキの説明に代えて、新たにどのような説明があたえられるだろうか。それはどのような文化的特徴をもつ集団(人々)であり、どのような関心とパースペクティブから私たちの分析の対象となりえるのか。これらを検討する前に、まずは、レッドデビルズの形成に関わる大きな背景として、韓国という国の歴史においてサッカーがどのような社会的意味をもってきたのかについて考えてみたい。

## 2. 韓国におけるサッカーの社会的意味

サッカーは、一般的にいて、二つの方法で楽しめる。まず、サッカーが好きで、実技を通して楽しむという方法、もう一つは、サッカーが好きだが実技は通さず、テレビの中継や競技場での観戦などを通して楽しむという方法で、前者は参加型のサッカー、後者は観戦型のサッカーと呼ぶことができる。韓国のサッカーも、この参加型と観戦型の二つの経路から成り立っており、その経路にそって、どのような社会的意味をもつかが説明されるだろう。観戦型ではバクスカップ(朴正熙大統領カップ)をはじめとする国家代表戦が、参加型では早朝サッカー会が代表的なケースとしてあげられる<sup>(4)</sup>。

まず、観戦型のサッカーについては、イ・ドンヨンの議論が参考になる<sup>(5)</sup>。彼は、サッカーというスポーツが大衆を支配していく過程を論証するために、バクスカップと日韓戦をとりあげている。バクスカップとは、朴正熙政権が、対外的には韓国の国際的な威信を高めるため、対内的には独裁政権を正当化し、労働者階級を督励するために創設した国際サッカー大会である。参加国はアジアのサッカー弱

小国に限られ、つまりは韓国代表が優勝するという筋書きがあらかじめ用意されていた。そして、政権の狙いどおり、この大会において韓国代表は成果を収め、国民に民族的な自負心をあたえるとともに、労働搾取の不当さと暴力的な国家権力の現実を忘れさせ、かわりに祖国の近代化へのユートピア的願望を高めるようになった。こうして、韓国におけるサッカーは、競技を観ること自体をこえて大衆の生活の中に入りこみ、愛国心、自負心、生産意欲といった情緒的なところにまで転移されながら持続的な支配効果を発揮してきた。バクスカップは後に大統領杯国際サッカー大会と改称され、現在はコリアカップとして存続している。

このバクスカップへの見方とともに、イ・ドンヨンは、韓国では、歴史的なトラウマとしての日本コンプレックスが、サッカーを通じて「対日本必勝コンプレックス」として表われていることも主張した。

なぜ韓国はスポーツ競技で日本に絶対負けてはいけないという考え方が国民を支配しているのか。簡単にいえば、そのような考えはスポーツを通して、日本から感じた歴史的な屈辱を補償されることができるという期待する心理があるからだ。「日本には絶対負けられない」、「日本に勝って痛快だ」などという考え方は一般的なものではなく、歴史的に特殊に構成された一つの虚偽意識としてのイデオロギーなのだ。それは歴史的に構成された一つの虚偽意識からのイデオロギーである。それは歴史的な被支配の主体たちが支配主体たちに対して持つ想像的な転覆の行為として、数多い異なる相対的な行為で代わることはできるが、抑圧の現存性と実体性、それ自体を代えることはできない。スポーツのような一種の民族・国家の代理戦で「日本に必ず勝たなければならない」という考えが一つの絶対的イデオロギーとして固まる場合、たとえわれわれが全てのスポーツ競技で日本に勝っても、それは決して勝てないことになるという逆説をもつことだ。なぜなら、それは絶対的イデオロギーを可能にしたことが過去日本と韓国の歴史的な関係からはじまったものなら、われわれは近代史で日本を政治的に支配したことがなかったし、「勝たなければならない」というコンプレックスは自ら今負けていることを前提としているからである。このような点はスポーツ競技で日本に対する「必勝コンプレックス」は大衆自ら作りだしたファシズム的な期待心理の効果でありながら、一人の個人を具体的な民族主体として呼びかける民族主義イデオロギーの重要な器材と機能する。一人の個人が過去自分の住んでいない民族の歴史的荷物を賦課させ、競技の過程と結果を愛国心に訴える。そしてこのような民族

的感情を自明にするメカニズムは実際民族という虚偽のアイデンティティを生産して、大衆を民族と国家の前で服従させるようにする現支配階級のイデオロギー的効果である<sup>(6)</sup>。

イ・ドンヨンによれば、韓国におけるサッカーは、個人に過去の民族の歴史問題を賦課し、競技の結果を愛国心に訴えている。そして、このような民族的感情を顕在化させるメカニズム自体が、民族という想像上のアイデンティティを生産して、大衆を民族と国家に服従させる現支配階級のイデオロギー的効果を発揮している。

イ・ドンヨンの主張は、韓国でサッカーを観るという行為が単純にサッカーの楽しさのみを追及するものではないことを示している。韓国のサッカーは、歴史的な言説と大きな関連性をもつことが強調されているのである。実際、韓国のサッカーは、社会全体の構造と深く関わっており、それはまた、ナショナリズムとの関連性を抜きにしては語られえないだろう。あらかじめ言うならば、本稿の主題である「レッドデビルス」の街頭応援も決してその例外とはならない。

次に、参加型の例として、韓国の早朝サッカー会についてふれておこう。ファン・ビョンジュは、イ・ドンヨンと同様、韓国のサッカーが政治的なイデオロギーを含んで発展したことを認めながら、そのひとつの効果として、早朝サッカー会という場において、下からの自発的なナショナリズムが増産されるようになっていくことを指摘している<sup>(7)</sup>。彼は、朴正熙政権がサッカーを通じて国民的主体を再形成したことを、イ・ドンヨンとは別の、次のような形で主張した。

下からの反応により重要な部分は、いわゆる「早朝サッカー会」である。1970年代に国家代表が国家的次元の想像の共同体を構築したとすれば、早朝サッカー会は日常生活における国家・民族共同体を構築したといえる。1970年代初期からはじまった早朝サッカー会のブームは、1978年頃になると全国にわたって1千あまりのチームが結成され、会員数5万人ぐらまでとなった。その結果、早朝サッカー連盟を結成し、全国大会を開催するようになった。…ソウルナンサン早朝サッカー会の場合、大規模の会員数で、愛国を強調する会まで作った。新しい形態の都市的「共同体」と見られる早朝サッカー会はサッカーを媒介にして社会的統合がどのように形成されているかを提示している。…1976年に発足したソウルのサンヤン早朝サッカー会は、地域機関長などを含む50人あまりで組織され、活発な活動を展開したが、「地域特性を考慮すると、貧し

くて乱暴な若者が多いため、地域社会を浄化するために創設した」という。これはサッカーを通じて社会統合が行われる典型的な事例といえる<sup>(8)</sup>。

ファン・ビョンジュの説明は、スポーツに参加することが、身体の鍛錬だけではなく、社会秩序の維持やナショナリズムの昂揚などのイデオロギー的効果を生み出していることを強調するものだ。早朝サッカーは、現在まで、韓国全土での習慣といえるほどに普及している。そして、そこでは確かに、自発的な参加と運営が行われている一方で、先述の観戦型サッカーと同じような機能が働いているとみることができる。

以上のように、韓国におけるサッカーは、そのナショナリズム昂揚の機能を無視しては分析が困難だといえる。2002年ワールドカップ時の「レッドデビルス」の街頭応援は、まぎれもなくサッカーにまつわる出来事であるが、それはどのように捉えられてきたのだろうか。

### 3. レッドデビルスの街頭応援

2002年ワールドカップ以降、実際に行われてきた議論をみると、「レッドデビルス」の熱狂的な街頭応援については次の二通りのアプローチがある。一つは、ナショナリズムの昂揚という問題には焦点を当てず、街頭応援を人々の自発的快楽の場とみなすアプローチである。そして、もう一つは、その全く同じ現象をナショナリズムの問題に引き戻して一多くは批判的に一分析を試みるアプローチである。

#### 3.1 自発的快楽の場

街頭応援を自発的な祝祭、快楽の場としてみなそうとするアプローチに付随する一般的な傾向は、1990年代を、消費社会の発展の時代として定義し、その時代的背景のなかで生まれた若者の文化をより肯定的に、自発的な創造性をもつものとして評価するというものである。たとえば、チェ・ウォンキは、次のような分析を行っている。

40万人からはじまった街頭応援は、ドイツとの準決勝を通じて700万人以上に増加し、大韓民国の全体国民が一つになれる重要な契機として作用した。男女老若のみんなが一つになって赤いレッドデビルスの服を着て、大韓民国の善戦を祈る祝祭を行われるようになった。…特に、韓国人にとってワールドカップを通じて赤い色で自発的な統合を実現できるような方向性を提供してくれたレッドデビルスの応援文化は、大きな意味を持つといえる。…「レッドデビルス」は、自発的、自発的で、非常に組織的であり、全国規模を持ってい

るという点、また仮想共同体で、民主的であるという点などは、既存の応援集団が持っていなかった特徴といえる。…文化変動を含んでいる様々な社会的領域での至らない部分が、今回のワールドカップを媒介して成された新しい応援文化の確立、そしてその内在的価値の社会的活性化によって90年代以降進行している韓国社会において文化変動の方向性の設定に一つの肯定的な可能性を開いたといえる。このような側面から考えてみると、集団主義と個人主義の間での調和の可能性、精神主義と物質主義の間での調和の可能性、韓国中心主義と世界化の間での調和の可能性、そしてオンラインとオフラインの間での調和の可能性などが、レッドデビルスの応援文化が提示している新しい文化運動としての可能性といえる。今韓国はワールドカップの神話をかなえた。世界の誰も到達できなかった神話をかなえており、この神話はこれから、また再び持続される歴史的脈絡の中でその光を発揮するだろう…<sup>(9)</sup>。

率直に言って、「調和」や「新しい文化運動」をキーワードとするこのチェ・ウォンキの議論は、魅力的な響きをもつ一方で、十分な根拠に基づいているようには思われない。ここで提示しておきたい一つの疑問は、仮に韓国代表チームの好成績が実現しなかった場合、彼の議論には同じように魅力的な響きが含まれただろうかということである。また彼は、韓国におけるサッカーの社会的意味と「レッドデビルス」の街頭応援の結びつきを念頭においておらず、それを念頭におくべきだと考えている論者たちに対して十分な応答をしているわけでもない。

ホン・ソンテは、「レッドデビルス」に関するさまざまな議論を踏まえたうえで、よりクリティカルな分析を行っている。彼は、現在の韓国の社会が多様な文化的価値と趣向を垣間見ることができる社会になったと述べた。

1990年代に入って、韓国は1960年代に西欧諸国がそうであったように、消費社会に入った。1970年代初め、韓国の一人当たりのGNPは300ドル程度であったが、20年後の90年代はじめには7000ドルになった。このような物質的な変化は、いうまでもなく大衆のライフスタイルに大きな変化をもたらした。消費社会は単に多くの人々が物質的な豊かさを享受するのみでなく、大衆個々人が自分たちの生活の趣向を重要視する価値観をもたらした。このような変化における重要な例がまさに「新世代の登場」であり、「ファンダム（ファンとしてのアイデンティティ）文化」であり、「レッドデビルス」であった。このような点から、消費社会こそ「レ

ッドデビルス現象」を作り出した最も重要な構造的基盤であるといえる。消費社会化は、韓国の数多くの人々を「レッドデビルス」に作り上げるもとを築き上げたのである。まるで暴雨のように「レッドデビルス現象」は起こった。しかし、このような現象は我々が特別な遺伝子や民族性を持っているゆえに起こった現象ではない。この現象は驚くべきものではあるが、あきらかに社会的根源を持っており、社会的に説明されるべき一つの社会的現象である。この現象は消費社会化という構造的変化がもとになってあらわれた「レッドデビルス」という新しい社会的主体の努力とワールドカップを国力の伸張や経済の跳躍というありふれた目標のための契機として利用しようとした国家と資本とマスコミの影響力が重なり合って形成されたものである。

ここで重要な点は、新しい社会的主体の登場を強調するのか、または国家と資本とマスコミの影響力を強調するのかという点である。はたしてどちらがより重要なのか。国家と資本とマスコミは、昔からこのような方式で国民を動員するためにこのうえなく影響力を行使してきた。しかし、そのような影響力はたった一度も成功しなかった。新しい社会的主体の登場とこのような変化を生んだ構造的変化にもっと注目するようになったのはこのような背景からである。ゆえに、「レッドデビルス」を社会的に考察するためには、構造的変化と契機的要因をきちんと区分し、構造的変化の内容と影響に対して十分に注意を向けなければならない。そして、契機的要因として何よりも重要なことは、国家と資本とマスコミの影響力ではなく、まさに我々選手団の善戦であったという事実を直視しなければならない。我々選手団が予選で落ちてしまったならば、果たして「レッドデビルス現象」は起こったであろうか。

「レッドデビルス現象」という純粋な熱狂とそれを利用しようとする動きを区分することは、この現象を社会的に考察するための別の出発点である。消費社会化に加え、インターネットは「熱狂的操作」を事実上不可能にする。「レッドデビルス現象」で我々が何よりも驚きあるいは楽しむべきことは、他人と積極的にコミュニケーションをとり、自分の趣向を追求する人々がこの社会の至るところにいるという事実である。80年代は70年代とさまざまな点で異なっており、90年代は70年代および80年代とはまた異なっている。「レッドデビルス現象」は、このような時代的变化を最も劇的に表現した事件であった<sup>(10)</sup>。

上にみるように、ホン・ソンテは、韓国社会の経済成長

を背景に、そこで生まれた消費主体をさまざまな角度から考察している。しかし、彼の議論も決して十分な内容のものとはいえない。何より、彼は、90年代の消費社会において、なぜ新たな文化の趣向の登場が生じたのかという問題を不明なままにしている。もし、彼の言うとおりに、新文化としてレッドデビルズが出現したとするならば、韓国の消費社会時代の特徴といえるマスコミによって大量生産された大衆文化の発展とレッドデビルズの出現が区別される根拠とは何であろうか。つまり、消費社会時代に入ったのち、資本が主導・大量生産し、若者たちがそのまま消費している文化的趣向と、レッドデビルズの文化的性格との差異点の分析が彼の議論には欠けているのである。

チョ・ヘチョンは、「レッドデビルズ」の街頭応援をより楽観的な観点で分析している。

ワールドカップは、韓国人自らが自分を好きになってもよいということを感じることができた貴重な空間であった。その空間は、新世代と旧世代が韓国で生まれたことを誇りに思っていた韓国人とそれを躊躇していた韓国人、そして外国人労働者と同僚、そして全く見ず知らずの外国人とともにみんなが一つになって「互い」を認め合った時間であった。そのような点で、ワールドカップは単なる祭りではなく、解放の日であった。一次的であったとしても、新しい自治空間、防衛的でも攻撃的でもない新しい民族主義的気運を経験した時空間であった。強要された近代化を経た社会の住民らにとって、それはめったに経験できない「下からの国民国家づくり」という体験の一種であったのだ。

…私は何よりも、ワールドカップの街頭デモを中心とした今回の大韓民国内の動きは、労働の存在ではなく、快楽の存在としての自分を発見したという点で革命的であったと考える。そして、自らの楽しむ存在としての姿を演出したのは若い世代であった。「愛国」の名の下に生まれてはじめて大人たちの「祝福」の中で思う存分楽しむことができた青少年たち、そして「禁欲的理性」と「欲望の身体」の間であたふたと戸惑いを見せていた20-30代の青年たちは、ワールドカップの期間にそのタブーを解消した。これ以上のほりつめるところなどなく、歴史の進歩を信じられなくなったことにかすかに気付いていた人々は、その間強要されてきた道徳、計画性と意志、そして未来のために今日を犠牲にするという道徳にこれ以上期待できないことを悟った時期であった。それは30代だけでなく40-50代も同じであった。「生産主義」世代は、今回のワールドカップの街頭で応援する人々を見ながらはじめて

「消費主義」的快楽の身体がいかに美しいかを発見した。「イデオロギー世代」が「欲望の世代」を見ながら希望を感じたはじめての瞬間であったといえよう<sup>(11)</sup>。

チョ・ヘチョンは、祝祭の雰囲気の中での自発的な「下からの国民国家づくり」を強調した。しかし、単純にスポーツ競技の応援を通じてそのような可能性が発見されたとするならば、逆にそこでは新たにファシズム的な雰囲気が生まれる可能性もあるのではないか。この点、すなわち「下からの国民国家づくり」がどのような方向に流れていくかという点について、残念ながらチョ・ヘチョンは全く言及していない。いうまでもなく、それは言及されるべき点である。

まとめていえば、レッドデビルズの出現を「快楽」といった要因に結びつけ、楽観的に評価しようとする議論には、現状としていくつかの大きな欠点がある。まずそこでは、韓国の社会でサッカーが持つ社会的な意味が見過ごされていることが多い。言い換えると、過去サッカーが愛国心を昂揚させ、国家イデオロギー装置として機能してきたことに対して（もとより）十分な注意が払われていない。もし街頭応援が韓国の社会に何らかのポジティブな可能性をもたらすのだと主張するのであれば、サッカーがもつイデオロギー的機能の存在に関して鋭く指摘したイ・ドンヨンやファン・ビョンジュラの議論に対して説得的な返答がまずなされるべきであろう。しかし、「快楽」論者たちによってその返答がなされることは、これまでのところないといつてよい。

さらにいえば、レッドデビルズの街頭応援参加者は、主に若者中心であった。韓国の社会で若者世代は、消費世代といわれており、彼らによって形成された大衆文化の場合、画一化と流行性という言葉で特徴づけられる。ここでもし「レッドデビルズ」の街頭応援を新しい文化運動とみなすならば、それと既存の消費志向性によって形成された文化との差異が明らかにされなくてはならない。だが、ホン・ソンの議論が象徴的であるように、これも「快楽」論者の間では明らかにされてこなかった。

### 3.2 ナショナリズムの昂揚の場

「レッドデビルズ」の応援の盛り上がりやナショナリズムと結びつけて捉え、検討を行っていく側の立場には、さらに二つの見方が存在する。一つは、レッドデビルズの街頭応援を、ファシズムの兆しとして捉える見方であり、もう一つは、レッドデビルズが含みもつ社会的な意味をより個別的・具体的に分析したうえで、街頭応援は、人々の自発的な参加に基づいていたが、結果的に現在、国家とメディアが生み出す（あるいは操作する）イデオロギーの流れにとりこまれていきつつあるとする見方である。

街頭応援をファシズムの兆しであると捉える見方の一例として、人権運動サランバンの声明をとりあげてみる。

数万名単位で全国の主要な街頭を埋め尽くして熱狂する赤いTシャツの涙は、我々の社会の民主主義、労働者、露店商の生存権、そして集会デモの自由を瞬時に抑えつけてしまった。我々は、「レッドデビルズ」現象によって、韓国社会の民主主義と人権の伸長が深刻に脅かされていることを警告する。

「レッドデビルズ」現象に関して、「進歩的」知識人たちの暴言は絶え間なく続けられる。「レッドコンプレックスの克服」、「6月抗争に現れた民衆のエネルギーの再現」、ひいては「我々民族の団結力と愛国心」を誇示したなどの発言は、知識人の真正な召命から離れた醜悪な発言にすぎない。あえて言うならば、「レッドデビルズ」現象には大きくうねる国家主義と盲目的愛国心があるのみである。正義に対する熱望ではない、勝利に対する熱狂があるのみで、体制に対する順応、政治的無関心、そして人間の主体性を殺す群衆心理があるのみである。「レッドデビルズ」現象はファシズムを可能にする病的現象である。「レッドデビルズ」現象は、決して「自発的」なものではない。どんな支配勢力であれ、自身の伝統性を誇示し、大衆の批判意識を麻痺させるための大衆動員は必須である。軍事独裁政権時代に、この動員は民衆人事、マスコミ、国民に対する強制と恐怖によってなされた。しかし、全ての統治が批判勢力の大規模な体制化を通じて行われる現在、大衆の動員は堅固な既得権勢力として成長した巨大なマスコミを通じてなされる。巨大なメディアが国民に国家主義をあおらずにどうやってこんな現象が可能となるのであろうか。<sup>(12)</sup>

この見方は、韓国の社会が、軍事独裁時代から、スポーツを媒介としたイデオロギー的操作を頻繁に行なってきたという歴史的事実への強い認識に基づいており、またおそらくその事実を認識するということが自体は誤りではない。しかし、このサランバンの声明についていえば、「レッドデビルズ」についての緻密な議論を行わず、ただ街頭応援の視覚的な印象にとらわれた形でのナショナリズム批判となっている感が強い。

クォン・ヒョクボムは、レッドデビルズの街頭応援をやはりナショナリズム昂揚の場として強く意識して捉え、さらに彼は、ナショナリズムに無批判な知識人たちへの批判を含めた議論を行なった。

急に愛国心と国民主義が出てきたとは言い難い。そ

れは、昔からあったものである。優越の根拠があまりなかったので表出できなかった愛国心、また劣等意識によって牽制されていた愛国心は23人の「国家」代表サッカー選手たちの連勝、特に先進ヨーロッパ強国連破という明らかな証拠によって爆発した。レッドデビルズの現象は韓国人のナショナリズムと分離することができない。…今回確認できたことは、民主主義と多元主義の発展にも関わらず、韓国社会に画一的集団主義が根強く残っているという点である。さらに、それは依然「共同体」または「祖国」を名分として、その否定性を隠蔽し同時に道徳的な正当性を付与する。祝祭の喜びの中で、事実全体主義的画一主義が支配する韓国社会の真面目さが今回現れたのではないか。それは、国家的祝祭という理由で(渋滞を阻止するための)車輪2分制運行に簡単に順応して、さまざまな種類の国家的キャンペーンに協調した「驚くべき秩序意識」と関連している。…2002年日韓ワールドカップが韓国社会のさまざまな分野に残した課題は多い。その中で、知識人社会に残したものは、それが一次的狂気の爆発であり祭りにすぎなかったとしても、韓国社会がかかえている根本的な問題を「恍惚」の中でそのまま露出させたという事実である。狂気の瞬間に真実が現れるのである。したがって、明らかな現象として現れた問題を客観的に分析、理解してそれを実践的空間で解決しようとする社会的努力が必要であるという点は明白である。しかし、より大きな問題は、現れた問題を問題として認識できない韓国のマスコミと知識人社会の批判的、独立的知性の麻痺現象である。いわば、知識人社会が近代的国民国家および集団的一元主義に陥ってしまっている問題である<sup>(13)</sup>。

ここに含まれている知識人批判は、傾聴に値するものである。ただし、サランバンの声明に対してと同様、ここでもいえるのは、ナショナリズムの危険性については大きな主張が繰り広げられる一方、話題となっている「レッドデビルズ」それ自体に対する関心や説明が不十分なのではないかということである。

その意味では同じような例となるが、次のチョン・ジンウンの議論は、韓国社会のナショナリズムが持つ排他性が「レッドデビルズ」の応援にもそのまま再現されるということをより具体的かつ明確に表したという点でとりあげておく価値がある。

「われわれ」の代表チームの競技に関心がなかったり、公共場所で応援に参加しなかったりすると、「退屈で楽しめない」人間として扱われて、参加を強要され

る雰囲気、甚だしくは赤いTシャツを着なかったという理由で責められる対象になる雰囲気は、われわれの社会の集団主義的な情緒が持っている抑圧的、排他的な特性を明らかに示す事例である。…韓国代表チームが勝った日は、共に堂々となり、韓国サッカーが負けた日には何かみすぼらしくなる心理状態は、国家と自分を同一視する強い集団主義的情緒がなければ不可能なことである。…民族主義はいつも排他性を内蔵しているので今回の祝祭で回復した民族的自負心が膨張主義的な方向に流さないという保障はどこにもない。…我々の社会の集団主義的情緒、膨張的国家主義に対する批判意識の欠如は、国家主義的動員のメカニズムがよく機能する土壌を提供する…このような状況で「知識社会」の多くの構成員たちでさえ、投票場を後に応援に没頭した「ワールドカップ世代」の「愛国心」について語り、またまだその土台が未熟に見える「開かれた民主主義の登場」を祝うことは憂慮すべきである。…英雄がいなくなった時代にメディアが作り出したスターに対する熱狂、民族主義的熱狂や共同体的アイデンティティさえもこれをでっち上げるメディアイベントの大きさとアウラが前提となっているからこそ確認可能な時代である。私がおおげさなのかもしれないが、人々は街頭応援を終えた後の飲み会などの席で、大概過去自分の遊び方通りで遊んでいたようだ。私としては今回の街頭応援で「新しく」登場した急激な文化的欲求を特に発見することができなかった。…数百万の人々がワールドカップという超大型儀礼に「自発的」に参加した。しかし、このような現象は、国家が「国民」を「呼びかける」というイデオロギーのメカニズムというわれわれの歴史的な状況に対して全然省察がなされていない状況で起こったことなので、その参加の「自発的」な性格にたいする評価も簡単なものではない。<sup>(14)</sup>

チョン・ジンウンは、韓国のサッカーが持つイデオロギー性を十分に念頭において、街頭応援を考察している。彼の主張は、従来から存在した韓国におけるサッカーのイデオロギー的な要素がそのまま街頭応援で再現したという点にある。私はチョン・ジンウンの主張に同感する。なぜなら、街頭応援がいくら自発的参加によるものであっても、国家・資本・メディアによる「国民づくり」は絶え間なく遂行されていくからである。

しかしながら、くり返すように、クォン・ヒョクボムにしても、チョン・ジンウンにしても、その議論は、レッドデビル現象独自の特徴についての分析が十分ではない。それに対して、最後にあげる次のユン・テジンとジョン・

キュチャンの議論は、より明確な分析の視野をそなえているといえるかもしれない。

「レッドデビルス」現象はそれほど単純な事件ではないということを強調しておく。この現象は、現代を生きる韓国人の日常生活の核心的な部分を証明する集合的意味生産行為である。…この事件は文化的でありながらも同時に、政治的意味も含まれている。…たとえば、「顔のないファシズム」がレッドデビルスを説明する重要な要因だとしても、ワールドカップ期間中、街頭を埋め尽くした数百万のレッドデビルスを「国民」として呼び、受動的に動員された存在であると結論を下すことはできない。パーティーに参加するように、街頭で行われる「装置」に能動的に「参与」した個別的主義を無視するのは適切ではない。「国民」として呼ばれることを拒否しながらも、「私」はなお外に出て行き、友人に会い、めったにない「街頭祭り」を安い値段で楽しむことができた。居間や職場の外に出て行くことに決めた主体は結局「私」である。「私」はただ楽しみを追求し、すてきな光景を見たかっただけだ。…声を上げて叫ぶ参加者にとって、「テーハンミングク（大韓民国）」というスローガンは、あるグループの中に属していることをあらわす集団的記号であって、どんなイデオロギーの意味も存在しない。参加者のさまざまな欲望は簡単に汚染されることもなく、支配ブロックが意図するように支配的イデオロギーコードによって統制されることもない。「私」の自発的な参加、コミュニケーション、そして趣向の表現は、「国家主義/民族主義イデオロギーの表出」だけでは適切に説明できない。「自発的な熱狂と表現」と「国家/資本/メディアによるイデオロギー的作動」は区別されなければならない。レッドデビルスの個別的動機、個人的欲求、スタイルを無意識的なイデオロギー行為へと還元してはならないということを意味している。<sup>(15)</sup>

ユン・テジンとジョン・キュチャンの主張は、街頭応援の現象に対して、より多様な解釈を試みたものであるとみることができる。つまり、彼らは、街頭応援を快楽の場やナショナリズムの順応などの言葉で結論をつけることを避けており、代わりに、何よりも、街頭応援の問題は社会的多様性を含んでいるという事実を主張している。より詳細に追えば、彼らは次のようにも述べている。

…しかし、レッドデビルスの能動的自立性と文化政治を過度に強調すると、この現象の危険な側面を看過しやすい。国家/資本/メディアがどのように作動してい

るかに対する考察が必要である。まず、容易周到になされた華麗なスポーツショーを通じて、国家と市民の同意を創出し、ヘゲモニーを構築していく戦略的側面を考慮しなければならない。ワールドカップが終わるやいなや、韓国サッカー協会長が有力な大統領候補として浮かび上がった点は注目するに値する。また、国家がレッドデビルスをいかに効率的に統制したのかを考察する必要もある。予測が困難であり政治的潜在力さえ持っている彼らを、国家は体系的に安全な区域内に押さえることに成功した。レッドデビルスの大規模な祭りにおける秩序と清潔さが賞賛されたという事実は、逆に国家統制の成功を暗示する部分でもある。次は、資本がワールドカップの狂気と熱情を支援しながら結局利潤の蓄積に連結させた側面も強調されなければならない。「デハンミングク（大韓民国）」を際立たせたスポーツ愛国主義とこれを後ろで支援した企業のコミュニケーション戦略は、民族主義を売り利潤を追求するコンセプトであった。「デハンミングク（大韓民国）」というスローガンから韓国の大企業であるSKが生産・流通させた商品であった。ワールドカップが終わった後も、レッドデビルスのイメージはさまざまな広告に現れ、視聴者を忠実な消費者と呼んだ。人々の表現への欲望は商品に対する欲望へと変化し、「大衆」は「消費者」に変身した。家庭から脱領土化したという主張は一理あるように見える。レッドデビルスが力を合わせて作り上げた「誇らしい東洋人」の主体性もやはり資本によってすばやく占領された「アジアの自尊心」というスローガンは「アジアの力（購買力）」へと修正され、マーケティング戦略の一部となった。ワールドカップが終わった後、メディアが作り上げた韓国人の姿は、国家と資本の作動体系を十分に確認させてくれる。大部分の保守的な言論は、ワールドカップ期間の間見せてくれた韓国の「国民」の偉大さに対して絶えず賞賛を送った。「国民」が強調されたすべてのメディア報道の核心は、常に「秩序」と「一体感」、そして「安全/安定」であった。メディアは国民を動員し、同時に販売する役割を忠実に実行したのである。人気があり、利益に結びつく限り、メディアは今後も引き続き愛国主義、民族主義、国家主義のイデオロギーを大声で叫びつづけるであろう。メディアの受容者が実際にイデオロギー的に吸入されたかどうかに関わらず、ワールドカップ期間とそれ以降、国家/資本/メディアの三角体系は、「立派な国民」を生産してきた。我々は単に楽しみと喜びを追求したのみであるが、権力の中心は我々の集団的熱狂を「愛国的国民づくりプロジェクト」に利用しようとした<sup>(16)</sup>。

ここでユン・テジンとジョン・キュチャンは、国家・資本・メディアが再生産する「国民づくり」に対する警戒心を訴えた。たとえ、街頭応援がいくら自発的で、祝祭的な要素があっても、結局のところ、われわれは国家・資本・メディアの支配から自由になったとはいえない。この見解は、韓国においてサッカーが持つ意味が依然、従来と変わっていないことを示そうとしている。すなわち、韓国においてサッカーがナショナリズムをひたすらに昂揚させる機能を持ち続けるという側面が、現在まで強く残っており、「レッドデビルス」の街頭応援にさいしても、その場に深く侵入し続けようとしている図式が浮かび上がるだろう。

### むすびにかえて

こうして、「レッドデビルス」の街頭応援をめぐるのは、さまざまな議論があった。街頭応援を自発的な快楽の場として分析した観点は、韓国の社会におけるサッカーの意味を軽視して、ナショナリズムの側面を軽視するという間違いを含んでいた。他方、イデオロギーの昂揚の場という観点は、サッカーが持っているイデオロギー的機能に関して、警戒心を掻き立てるようになった。しかし、街頭応援に参加した個々人と国家、資本、メディアとの関係については、より具体的な検討が要求されるという課題を残した。

ワールドカップの祝祭が終わって、人々は自分の日常生活に戻った。その後、韓国でワールドカップと関連したことがいくつかあった。まず、韓国のサッカー協会会長が、若者たちの圧倒的支持を受けて、大統領選挙候補として登場した。また、国家、資本、メディアは、ワールドカップの4強進出という神話を作り出し、経済4強進出というスローガンをかけ、労働者の犠牲を訴えている。もし、「レッドデビルス」の街頭応援が自発的なものとしたら、このような状況に対してより抵抗的な反応が期待される。しかし、そのような兆しは、あまり見られない。このような結果と軍事政権で行われたサッカーのイデオロギー性と何が違うのか。私は、今「レッドデビルス」の街頭応援の問題を肯定的な論調で主張した人々に冷笑的批判しかできない。だから、私は、レッドデビルスの街頭応援を快楽の場として理解するには大きな違和感を覚える。そして、街頭応援をナショナリズムの昂揚の場としてみなしたい。だからと言って、そのような解釈が多様な社会的含意を分析したものとはいえない。街頭応援に参加した多くの人々は、それぞれ異なる社会的コンテクストを持っている。そこに参加している人々は、職業、性差、世代、地域、階層などによって分割されていた。したがって、互いに違う立場で街頭応援に参加したといえる。そのような状況の中で、国旗をふりながら大韓民国を叫ぶ行為が持つ意味は、人々によって

それぞれ違うだろう。そして、そのような応援行為が自発的であれ、動員であれ、国家、資本、メディアは、絶え間なく「国民づくり」を呼びかけるのは自明である。「レッドデビルス」を研究することは、このような社会的な状況を視野にいれ、より多角的な分析が必要である。ワールドカップが終わっても、「レッドデビルス」のインパクトはまだ終わっていない。それをより批判的な立場で分析するのは、これから大きな課題として残っている。

- (1) イ・ドンヨン、「レッドデビルスとサポーター文化」『当代批評』、サンイン出版社（ソウル）、2002年夏号、p.203.
- (2) チェ・ウォンキ、「レッドデビルス、その社会文化的意味」『ワールドカップ、神話と現実』、ハンウルアカデミー出版社（ソウル）、2002年、p.26.
- (3) チェ・ウォンキ、前掲書、pp.31-34.
- (4) 韓国の場合、日曜日の朝、学校のグラウンドに町の人々が集まってサッカーをする集いがある。これは全国的にどの町でも存在するといえる。
- (5) イ・ドンヨン、「スポーツ、スペクタクル、そして支配効果」『スポーツ、どのように読むものであるか』、サンイン出版社（ソウル）、1998、Pp.182-196.
- (6) イ・ドンヨン、前掲書、pp.192-194.
- (7) ファン・ビョンジュ、「林正熙時代のサッカーと民族主義」『当代批評』、サンイン出版社（ソウル）、2002年夏号、pp.145-167.
- (8) ファン・ビョンジュ、前掲書、pp.159-160.
- (9) チェ・ウォンキ、「レッドデビルスの社会・文化的意味」『週刊韓国』、2002年7月11日号.
- (10) ホン・ソンテ、「ワールドカップ、レッドデビルス、それを取り巻く物語」『FIFAのワールドカップを超えて』、2002 KOREA-JAPAN SYMPOSIUM 発表文、pp.44-45.
- (11) チョ・ヘチョン、「レッドデビルスとサポーター文化」『当代批評』、サンイン出版社（ソウル）、2002年秋号、pp.24-47.
- (12) ホン・ソンテ、前掲書、pp.49-50.再引用.
- (13) クォン・ヒョクボム、「ワールドカップ「国民祝祭」ブラックホールに吸いこまれていった「大韓民国」」『当代批評』、サンイン出版社（ソウル）、2002年秋号、pp.62-89.
- (14) チョン・ジンウン、「「赤い波」現象を通じてみた欲望の文化政治学、その創造と構成の間」『当代批評』、サンイン出版社（ソウル）、2002年秋号、pp.8-23.
- (15) ユン・テジン、ジョン・キュチャン、「レッドデビルスとメディア：「国民」イデオロギー対欲望する大衆」『FIFAのワールドカップを超えて』、2002 KOREA-JAPAN SYMPOSIUM 発表文、pp.161-170.
- (16) ユン・テジン、ジョン・キュチャン、前掲書